

妊娠に気づかないまま突然父親になった一男性の体験

—生後2年目における面接からの分析—

塩野悦子

宮城大学看護学部

キーワード

父親、低体重出生児、体験

father, low birth weight infant, experience

要 約

本研究は、妊娠に気づかないまま突然父親になった一男性が、どのような体験をしているのかを記述することを目的としている。対象のパートナーが妊娠に気づかないまま強い腹痛を訴え、低体重出生児を出生した。パートナーのこの事態への受け入れは肯定的であったが、突然父親となった対象は面会時も表情が固く、タッチングや抱っこに対して消極的であった。2年後に半構成的な面接をして、当時の気持ちを振り返ってもらうと、最初に〈突然の事実に混乱した咄嗟の気持ち〉を示し、〈親的行動を取ることに不慣れ〉があったが、〈早期から子どもへの愛着〉を抱いていた。また〈パートナーとの危機的状況からの調整〉をして乗り越え、〈両実家の支え〉によって、子どもとの関わりを楽しんでいた。入院中には事態の重圧のためか子どもへの愛着は抑圧されていたのかもしれない。長期的にフォローしていくことが有用と思われた。

An Unexpected Father's Experience : A Study Two Later

Etsuko Shiono

Miyagi University School of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to understand and describe the experience of one man who became a father suddenly, without prior knowledge of this partner's pregnancy. She had experienced stomach pains and went to a hospital where she soon gave birth to a low birth weight infant. She adapted to the situation well, but he did not accept the baby at first, neither touching nor holding it. This study is based on an interview conducted two years after the child's birth and using opened questions. The man report initial feelings of confusion at the sudden event and problems in participating in parent-like activities. However, he soon developed an emotional attachment to the child and, after facing a crisis with his partner, became a true parent. We found that nursing approaches for supporting this man were difficult and that continued long term attention should develop a better understanding for all concerned.

I. はじめに

妊娠期間は男性にとっても親になるための重要な準備期間である。男性にとっては身体的な変化がないため、なかなか妊娠期には父親になる実感がわからないものであるが、これからの生活の変化を予測したり、子供への関心をもつなどの役割変化への準備をしたり、無意識的にでも父親になる心構えは整えているといわれている¹⁾²⁾³⁾。

しかし、今回、交際中の女性が妊娠に気づかないまま出産に至ったため、このような準備がなく、突然父親とならざるをえなくなった男性の事例と関わった。母親となったパートナーはこの事態をスムーズに受け入れていったが、男性の方は、なかなか児との触れ合いを楽しめる様子がないという看護問題を残して退院に至った(日齢106)。児は推定在胎週数28週の低体重出生児であった。低体重出生児の父親の愛着は徐々に現れてくるというが⁴⁾⁵⁾、通常の現われ方より遅延していると考えられた。人生において心の準備がなく突然父親にならざるをえなくなった状況が、児の受け入れに関連していると考えられたが、何が影響しているのか明らかにし、このような状況にある看護のあり方を再考する必要性を感じた。

そこで、育児も落ち着き、児の成長も軌道に乗ってきた生後2年目に面接の機会をもち、突然父親となってからどのような体験をしているのかを記述することを目的に本研究を行なった。

II. 研究目的

妊娠に気づかないまま突然出産に至った未婚女性のパートナーが、突然父親になるという事態をどのように受け入れながら体験してきているのかを記述することを目的とする。研究の焦点は、父親としての育児生活も比較的安定してきている生後2年が経過した時点で、当時の出来事をどのように受け止め、どのように乗り越えてきたのかを語ってもらい、この一男性の体験の中で特徴的であると思われる現象を記述することである。

III. 研究方法

1. 研究対象者および受持ち看護者との関わり

対象者は当時、某総合病院未熟児室に搬送されてきた低体重出生児の父親Kさんである。研究者は入院中より対象者のケアについて受持ち看護者から相談を受けるという形で参与していた。入院中やその後の状況については受持ち看護者から情報を得ていた。

研究者は1歳半の検診で対象者が来院している際に出会い、対象者にこれまでの関わりと今回の研究内容の説明を行い、研究協力の承諾を得た。また母親であるパートナーも同席しており、両者に承諾を得た。

受持ち看護者は本研究の全過程において重要なメンバーである。しかし対象者およびその家族への倫理的配慮から、看護者の所属等の匿名は余儀なくされ、その看護者には了承を得ている。対象者にも特殊な事例として今後のケアに結びつけたい旨を説明し、倫理的配慮をすることを条件に研究として分析することの了解を得ている。

2. データ収集および分析方法

面接時期は低体重出生児であった児の成長が安定し、親として育児生活も落ち着いてきていると思われる生後2年の時期を選択した。受持ち看護者と共に家庭訪問を行い、対象者に半構成的なインタビューを実施した(約60分)。面接内容のテープ録音はKさんの了解を得て実施し、プライバシーへの配慮に十分留意した。パートナーも同席しており、必要な場合は彼女にも質問した。パートナーが同席することのバイアスはこの研究の限界のひとつと考えられるが、入院時から両者を対象にケアしてきているため、自然な面接環境の側面を重視して面接状況を設定した。

面接では、2年前にパートナーが突然妊娠そして出産したと知らされた時の思い、面会時に児と触れ合うことへの気持ちなどを想起してもらい、またその後の父親になっていく上での気持ちなどを自由にありのままに語ってもらうよう配慮した。分析は、対象者の体験に特徴的と思われる現象に着目し、カテゴリーを抽出し記述的に分析した。分析は受持ち看護者との合意を得ながら実施した。

IV. 結 果

1. 対象者の背景

Kさんは当時22歳の大学生である。交際半年のパートナー（当時20歳・店員）が激しい腹痛を主訴として救急車で産婦人科に搬送され、そこで初めて妊娠の事態を知り、低体重出生児を出産した（推定在胎週数28週・出生時体重1300g・アプガースコア6点）。Kさんたちは、出生届に合わせて入籍した。

児は未熟児室のある総合病院へ搬送され、呼吸緊迫症候群・動脈管開存症・胃食道逆流症などを合併し治療が施行された。日齢26で人工呼吸器抜管、日齢55でコットへ移送、日齢58で経口哺乳開始となり、日齢106で退院となった。

パートナーは突然母親になったものの児への関わりに問題はなかったが、突然父親となることになったKさんは、児を受け入れるのが困難である様子が長く続いた。看護側からは児の回復過程（3

つの時期に区分①人工呼吸器抜管まで、②コット移床まで、③退院まで）に応じて、父親が児を安心して受容できるように、タッチングや簡単なケアを勧めたり、退院後に向けての指導を計画していった（表1参照）。

結果的には、Kさんの反応は、児にあまり呼びかけたりせず、笑ったりせず、児の状態への質問をすることもなく、ケアやタッチングの際には緊張していることが多くみられた。Kさんは大学やアルバイト、母親は生計の担い手として仕事に出るため（生後1ヶ月に仕事復帰）、面会の頻度も徐々に少なくなり、結局祖母（母方）が退院指導を受けていた。退院前の準備は十分には行われなかったが、児の状態が安定していること、親子関係が疎遠にならないようにすること、また支援体制が整ったこと（母親実家の近所に転居）から、退院に至っている。

表1 Kさんの児に対する反応と看護（入院中）

| | Kさんの児に対する反応 | 看護判断 | 看護計画 |
|-----|--|--------------------------------------|--|
| 第1期 | <ul style="list-style-type: none"> ・黙って児を見つめ、言葉がない ・タッチングを勧めても拒否・表情が暗い ・看護婦の声かけに淡々としている ・自ら児の状態への質問がない ・日齢9）母に勧められ初めて手に触れる | 突然の出来事で混乱し、児を受け入れることがなかなかできない | 児の存在を受け入れられるよう積極的にタッチング、声かけを勧めていく |
| 第2期 | <ul style="list-style-type: none"> ・面会が週に1回くらい（必ず母と） ・タッチング勧めてもほとんど拒否 →「まだこわいから」 ・日齢49）恐る恐る児の頬を指でつついている姿がみられる | 受容がまだできていない | 父が児に安心して接していけるよう配慮する。父の気持ちの変化を見守りながら関わる |
| 第3期 | <ul style="list-style-type: none"> ・母が行った後に、父も続いて抱っこや間接哺乳をやる姿がみられるが、まだまだ緊張している ・面会間隔は10日～2週間。退院指導には来院できず、試験外泊もできず（父は大学、母は仕事という理由で） ・退院時にも自ら児の状態への質問なし | 積極的に児を受け入れる行動がまだみられない。退院後への準備ができていない | 少ない面会であるが、間接哺乳や退院指導ができるように配慮する。試験外泊・母児同室を勧めていく |

第1期（出生後～日齢26：人工呼吸器抜管までの時期）

第2期（抜管後～日齢55：コット移床までの時期）

第3期（コット移床後～日齢106：退院までの時期）

2. 妊娠に気づかないまま突然父親になることになった体験

2年後に対象者が当時の出来事を振り返り、父親として現在に至るまでの体験を語る中から特徴的だと思われる5項目のカテゴリー（〈〉で記載）を抽出した。そしてそれらに関連するサブカテゴリー（《》で記載）を文中にて記述、説明している。

1) 〈突然の事実混乱した咄嗟の気持ち〉

その当時の気持ちを聞くと、「思ったことをそのままいってもいいんですか」とKさんは確認してから、開口一番に「正直死んでくれた方が楽だと思いました」と述べ、《子どもの存在を否定したい》という気持ちが咄嗟に働いたことをまず吐露した。そして「学生でお金もないし最初に思ったことはどこかに逃げようかということで、そういう方向のことしか考えられませんでした」、「相手にも生後1日目で、東京に逃げることを相談していた」と述べ、《現実から逃げ出すことを本気で考える》気持ちでいっぱいであった。

しかし「翌日相手の両親に連絡が入り、(逃げることはできない状態で)結局親に結婚させて下さいといった」ということで、親という社会的現実を直視せざるを得ない状況を目の前にして、この気持ちは短期間で消失している。また「結婚とか考えていた状況じゃないのに生まれちゃったんで、その場合だれでも結婚しか選択肢がないと思う」と、逃げ出すことができない状況に迫られての選択であった。

2) 〈親的行動を取ることへの不慣れ〉

入院中に看護婦が「赤ちゃんに触ってみませんか？」という問いかけになかなか応じてくれなかった理由をきいてみると、「ただ人前で触るのが恥ずかしいから」ということであった。また、「(あまり深く考えているのではないが…)人前でかわいいとあまり言いたくない」、「触っているときの顔をあまり見られたくない」と、《人前で親的行動を取ることへの恥ずかしさ》を述べていた。

またKさんは「今まで子どもと接することは

あまりなかった」、「前は人の子どもには声などかけられなかった」と述べ、《子どもと接することへの不慣れ》なことも影響している。「今では同じくらいの子どものかみりと平気で手を振ったりします」と、自分の子どもを通して親としての普通のふるまいが自然にできるようになったことを述べている。

3) 〈早期からの子どもに対する愛着〉

2年後にあらためて当時の児に対する気持ちを聞いてみると、「医者話から、峠は3日だったから、とりあえず3日間は子どものことは考えていました」という《子どもの安否を案ずる気持ち》が聞かれた。

また、入院当初の児はたくさんの管に囲まれていたにもかかわらず、「初めて見たときからかわいいと思った」、「初めて見たとき自分に似ていると思った」、「保育器に入っていて隙間から指を握ってくれたとき惹かれるような気持ちになった」、「早く退院できないかな、早く一緒の部屋にいてみたいな」、「家に帰ってきて児のことを思うと愛着を感じていた」とKさんは早期から《子どもへの没入感情》を感じていたことを表現していた。

4) 〈パートナーとの危機的状況からの調整〉

出生直後から、二人の喧嘩は絶えなかったという。Kさんの言い分は「生まれたかたちがこうだったから、自分の責任じゃないと思った」、「妊娠したというのも気づかないで、その上その日に生まれたから、俺だけの責任じゃないという思いが強い」と《パートナーへの責任転嫁》がどうしても原因になっていたという。パートナーの言い分は「それを言われたら何もいえない」、「喧嘩をすると要らないだの何だのという話になる、生まれた後はそういうので、いっぱい喧嘩しました」と述べていた。

また、パートナーが土・日は仕事のため、「2人で世話している時には頭にこないんですけど、最初の1、2ヶ月は、土日とか自分が休んでも1対1で見えていたからすごく大変だった。泣き声とかうるさいと思ったし、遊びに行きたいし、ストレスとなって、喧嘩していた」と述

べ、《1人で育児をするときのストレス》も喧嘩の原因であった。

「今ではとりあえず、あいつ（子ども）の前じゃ喧嘩できないなというのがありますし、ほとんど喧嘩はしなくなりました」、「今では怒らなくなったなあ。子どもが大きくなってきて楽しいんで…」と《子どもを中心とした生活への調整》を述べ、2年間を通して二人で危機的な状況からの調整ができるようになっていく。またパートナーは「この（Kさんの）2年間の変わりようはすごく、とてもかわいがらなくなった」と《パートナーからの父親としての満足》を受けていた。

5) <両実家に支えられていること>

この出来事をなかなか受け入れることができなかつたKさんの実父は、子どもが大きくなるに連れ、変化してきたという。そしてKさんは「おじいちゃんになるとこんなに変わるものかになって……」、「母は何で自分の息子はあまり可愛がらないのに〇〇にはあんなに優しいんだろうと言っています」、「そんなに仲良くなかったのですが、今は普通に話しています。昔以上に話せるようになったという気がします」と、《実父との関係の向上》に関する気持ちを述べている。

パートナーは「私の親は最初はどうかと思っただけですが、すぐに認めてくれた」、「今まで一番頼りになる親だなあと思いましたね」と述べ、Kさんも「こちらの両親が普通に喜んでくれましたね」と《パートナーの両親の祝福による安心感》に関して述べていた。このように<両実家にしっかりと支えられていること>が突然親になることになった二人のかけがえのない基盤であることを表現していた。

V. 考 察

1. 心の準備がなく父親になるという体験

NICU入院児の父親は、非常に多忙であり、最初に父親が医師より子どもの説明を受け、子どもと対面し、子どものことを母親に伝えたり、励まさないといけない⁹⁾。また、正常新生児の父親と

比べて不安得点が高く、説明されたことをよく理解することができず、初めて入室したNICU室の一種異次元な環境が過剰な刺激となり、予想外の姿の児を目の前に対処行動も欠如している⁷⁾。また無事に生まれた安堵感と生命への不安が混在している不安定な状態にあるといわれている⁸⁾。

このように単に低体重出生児の父親になることだけでも、かなりの極限状態となるが、その他に未婚であること、学生でアイデンティティ確立途上という発達段階にあること、妊娠発覚による猶予期間がなく不意打ちに父親にならざるを得ないことがKさんの身に一気に降りかかり、<突然の事実で混乱した咄嗟の気持ち>を示したことになる。父親になること以前に子どもを否定したり、社会的な現実から逃げるという対処行動は、正に通常の状態を超えていたものと考えられる。

一般的に妊娠した事実とその後の妊娠期間が、「親として社会的に認知されること」になるが、Kさんにはこのプロセスが欠如した状態であるため、社会から逸脱する方向へ走ろうとしたのかも知れない。妊娠期間というものが、社会性の準備期として非常に重要な時期であることがこの事例からあらためて理解できる。

また、一般的に妊娠期間は、父親にとって重要な親役割のための準備の時期といわれている。May⁹⁾は父親の妊娠中の準備段階として、モラトリウムの時期があり、その間に妊娠との折り合いをつけていくと述べている。Grossman¹⁰⁾は、男性は妊娠後期に、より妊娠に関わり、生活パターンの変化の必要性を感じていると述べている。またObrzurt¹¹⁾は父親になるために準備していることとして、生活環境の準備、財政計画、準備クラスへの出席、子どもへの興味をもつこと、生活スタイルの変化を予測すること、父親役割を考えること、子どもとの活動計画、父親に関するものを読むこと、他の父親を観察すること、他の父親と話すことなどを面接調査から明らかにしている。

Kさんにとってこの親になる準備が欠如していることになるが、《人前で親的行動をとることが恥ずかしい》というKさんの反応は、妊娠期の準備がないことに起因しているとも考えられる。す

なわち、妊娠中は、男性が親的あるいは母性的な行動や言動をとっても、それは父親になるから当然のことである、という社会的認知との関連が大いに考えられるからである。「男性とは…こうあるべきである」というステレオタイプの考えは、男性の生育過程で自然と身につくことが多いが、妊娠期間はこの考え方をある程度はやわらげてくれているのかもしれない。

2. 入院当時は見えにくい父親としての気持ちやふるまい

入院中は、Kさんの反応から「父親の児の受け入れがむずかしい」という看護問題があげられていた。しかし、2年後にインタビューしてみると、＜早期から子どもへの愛着＞が芽生えていたことが明らかになった。

NICU入院児の父親の心理というのは、出生直後はcrisis状態で不安と躊躇の気持ち、コット移床時には愛着を示すことが多く見られ、退院時にはさらに愛着を示すことが多くなるという¹²⁾。また父親の未熟児への愛着の示し方には段階を必要とする¹³⁾が、Kさんは妊娠期に児をイメージすることなく、突然対面したわけで、なかなか親的な行動を取ることに時間が必要であったことは当然の結果と思われる。

しかしKさんの子どもへの愛着は、早期から芽生えており、子どもへの没入感情：engrossment¹⁴⁾としての特徴（赤ちゃんをかわいいと思う、わが子の特徴に気づくなど）のいくつかを体験し、＜混乱した咄嗟の気持ち＞とはアンビバレントな心理状態であった。未熟児出生直後の父親はネガティブな不安定な気持ちもあるが、早期から児への愛着を示す傾向があり、両方の心理が混在していると吉田¹⁵⁾は述べている。

ただし、生まれたばかりの児の健康に心配な事があれば、父親に没入感情が生じるのを抑制することがあるとGreenberg¹⁶⁾が述べているように、入院中はKさんに芽生えた没入感情が表現されることはなく、父親としてのことばやふるまいが抑制されていたと考えられる。低体重出生児の父親は、正常新生児の父親に比べ、新生児への没入感情である、触覚的認識と気分の高揚という点で抑

制されていることを田中¹⁷⁾は述べており、ただでさえ「触りたい」「気分がウキウキする」という感情は、表面には見えにくいものである。Kさんの場合は、子どもとの接触にもともと不慣れであるという個人的な特性もあり「児を受容できていない」というような面が浮き彫りになったのであろう。

臨床的には、観察によるNICU入院児の父親の不安の把握には限界があり、彼を支える看護者がいると明確に伝えられ、自信の不安を言語化することが必要であると橋田¹⁸⁾は述べている。入院中のケアでは、このような点に大いに留意されていたが、Kさんの緊張して寡黙である雰囲気はなかなか溶けることはなかった。短期間のうちに、婚姻・未熟児の出生ということを受け入れるにはかなりの重圧であり、このような反応となったと考えられる。しかし＜早期からの子どもへかわいいと思う感情＞は、現在のKさんの父親としての原点であり、危機的状況にある父親の子どもへの没入感情のアセスメントは、長期的にみても有用であると思われる。

3. 突然父親となった男性を支えるもの

《パートナーへの責任転嫁》の気持ちがいづまでも残っていたKさん、それを受けとめなければならぬパートナーとの確執がかなり続いたことは事実である。現実的には両者に責任があるというのが常であるが、なかなか建設的に構えられるようになるには時間を要している。

親になる移行期に夫婦が適応する1つの要素として、「摩擦処理パターンとその能力」があり、親になるには夫婦で喧嘩をしなければならないことがたくさんあり、それを乗り越えていけるかどうかの問題であるとBelsky等¹⁹⁾は述べている。Kさんの場合は、《パートナーへの責任転嫁》、《1人で育児する時のストレス》などの衝突を通して、パートナーとの危機的状況からの調整を体験してきている。この2年間の中でパートナーとの摩擦処理能力を高め、「子どものいる前では喧嘩できない」と述べているように、《子どもを中心とした生活への調整》に価値をおくようになり、《パートナーからの父親としての満足》という肯定的評

価を受けて、さらにお互いを認め合う関係へと
なっている。

さらに親になる移行期に夫婦が適応する要素
として「情緒傾向」もその一つと述べている²⁰⁾。パ
ートナーやその家族が楽観的に受けとめ対処して
いることは大きな支えであろう。さらにKさんが
入籍・出生届などの社会的な役割を担いながら、
この現実立ち向かっていくことができたのは、
この《パートナーの両親の祝福による安心感》が
大きく関連しているだろう。

また、2年後に《実父との関係が向上》したこ
とを述べていることから、子どもの成長を通して
自分の父親とのコミュニケーションを図れるよう
になり、自分自身も安定した父子関係を実感でき
ることは、自分の子どもへも安定して関われるこ
とにつながるのではないと思われる。

Kさんカップルは10代ではないが、多くの10代
未婚出産例においては、意識が未熟かつ出産・育
児に関する知識が乏しい場合、相手との関係が不
安定な場合、経済的に不安定な場合、バックアッ
プがない場合などの社会的問題を抱えていること
を把握するのが重要とされている²¹⁾²²⁾。Kさんにと
って危機的な状況で父親になることになったが、
パートナーに定職があったこと、パートナーの家
族が第一のバックアップになったことなどは大き
な要因であったと考えられる。

4. 本研究から看護に活かせること

本研究のような状況にある対象への看護として、
タッチングなどにより子どもとの関係を高めるケ
アはもちろんであるが、まずは突然の出来事を受
け入れるには時間を要することを理解し、混乱し
ている状況に看護側も配慮していることを伝える
ことが重要と考える。産科領域は男性である父親
にとってどうしても萎縮しがちな場所であるが、
父親になる人への看護者の役割の意思表示は安心
を与えられると思われる。

また児への没入感情の表出を抑制している要因
を把握し、少しでも入院中に充実した機会がもて
るように配慮すべきであろう。今回の事例では、
2年後の面接で初めて父親が児への愛着行動や没
入感情の経験を表出したが、入院中ではそれがな

かなか把握できなかった。このような危機的な状
態にある父親に対しては、アンビバレントな心理
状況にある特徴を再認識し、子どもへの思いをな
るべく表出できるような支援が重要と考える。

さらにカップルの調整力がどのように働いてい
るのかを把握することも重要である。低体重出生
児の母親と父親としてケアしていくのは当然であ
るが、突然人生を共にしていかなければならない
関係になる2人のチーム力を見守っていき、誕生
した子どもがどのような環境で生きていくのかを
配慮していくことも必要になってくるだろう。退
院後も長期的にフォローしていくことはその理解
を深めることにつながると思われる。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、突然、低体重出生児の父親にならざ
るを得ない状況になった一人の男性の2年間の体
験を記述したものであるが、データの確認の繰り返し
等による全体の意味の把握までには至ってお
らず、引き続き対象との関わりからその意味を深
める必要がある。また入院期間中は親の児に対
する反応という視点から看護が展開されているが、
2年間という歳月の中では相手との関係性や周囲
の理解の変化、発達する父子関係が重きを占めて
きており、それぞれの要因の重要性をみつけ、研
究の焦点をさらに絞っていく必要がある。

本研究の対象は、20代前半の未婚カップルの計
画外の出産、低体重出生児の出生、学生という社
会的立場であることなど様々な要因が複合してい
るが、妊娠という期間が意識的に存在しなかった
ことはKさんに唯一の要因となる。この事例から
父親になるための準備として妊娠期間の重要性ま
では言及・検証はできないが、この要因にどのよ
うな意味があるかを見出すための研究方法を考慮
していくべきである。今後も父親となる人への援
助として様々な方向性から検討する一資料として
いきたいと思う。

謝 辞

本事例を入院当初から共に考えてきた看護者Iさ
ん、そして本研究に快く協力して下さったKさんご
夫妻に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) May, K., Antle: Factors Contributing to First Time Fathers' Readiness for Fatherhood: An Exploratory Study, *Family Relations*, 31, 353-361, 1982
- 2) Obzurt, L., A., Joy: Expectant Father's Perception of Fathering, *American Journal of Nursing*, 76(6), 1440-1442, 1976
- 3) 塩野悦子: 父性の発達と父子関係、村本淳子他編、母性看護学概論、92-95、医歯薬出版、1999
- 4) 中富利香: 低出生体重児の育児における父親の役割、東邦大学医療短期大学紀要、11、40-50、1997
- 5) 松田美由紀他: NICU入院児の父親への段階的援助方法、日本看護学会27回集録 小児看護、66-69、1996
- 6) 飯村直子: 未熟児をもつ家族(父親)へのケアと援助のポイント、小児看護、21(7)、848-851、1998
- 7) 橋本知加子他: 当院NICU入院となった児の父親の不安に関する調査、日本看護学会28回集録 母性看護、18-20、1997
- 8) 下田あい子他: 当NICUに入院となった児の父親の初回面会時における不安の分析、*Neonatal Care*, 9(11)、1034-1040、1996
- 9) May, K., Antle: Three Phase of Father Involvement in Pregnancy, *Nursing Research*, 31(6), 337-342, 1982
- 10) Grossman, F., K.: Experience of Fathering, Grossman, F., K., et. al.: *Pregnancy, Birth and Parenthood*, 141-168, San-Francisco, Jossey-Base, 1980
- 11) 前掲書2)
- 12) 前掲書4)
- 13) 前掲書5)
- 14) Greenberg, M., Morris, N.: *Engrossment: The Newborn's Impact upon the Father*, Cath, S., et.al.: *Father and Child—Developmental and Clinical Perspectives*, Little, Brown and Company, 1982
- 15) 吉田妙子他: 未熟児をもつ父親の心理反応過程の分析、日本看護学会28回集録 小児看護、101-104、1997
- 16) 前掲書14)
- 17) 田中佐由里他: 初回面会時における低出生体重児の父親の没入感情に関する検討、日本看護学会28回集録 母性看護、21-23、1997
- 18) 横田正夫他: NICUに入院した児の両親の不安と両親への援助、日本新生児看護学会誌、6(1)、2-8、1999
- 19) Belsky, J., Kelly, J.: *The Transition to Parenthood*, 1994, 安次嶺佳子訳、子供をもつと夫婦に何が起ころか、第2版、190-210草思社、1995
- 20) 前掲書19)、168-189
- 21) 加藤治子他: 10代妊娠と支援のあり方、産婦人科治療、66、291-295、1993
- 22) 大川美恵子他: 過去8年間における10代分娩症例の検討、思春期学、16(1)、1998